◉トピックス

内視鏡外科手術について

第二外科　助教授　――藤村　昌樹――

腹腔鏡や胸腔鏡を使って手術を行う「内視鏡外科手術」は、患者さんに大きな負担をかけない低侵襲手術として注目を集めている。１９８７年にフランスで胆石症に対して行われたのが、世界で第一例目の内視鏡外科手術であった。

わが国では、１９９２年に胆石症や胆嚢ポリープに対する腹腔鏡下胆嚢摘出術が保険適用となりこの術式が急速に全国に普及した。現在では胆嚢摘出術の90％以上が本法で行われている。滋賀医科大学では１９９０年からこの方法で手術を行い、当初は胆嚢摘出術のみであったが、次第に適応を拡げ、現在ではお腹（なか）のすべての臓器に対し内視鏡外科手術を行っている。その結果、これまでに関連施設を含め１０００例以上の内視鏡外科手術を経験してきた。

内視鏡外科手術は、腹部、胸部、骨盤内の臓器、腎臓を含めた後腹膜のほか、頚部腫瘍や乳腺腫瘍に対しても試みられている。さらに、心臓の手術にも応用されているほか、欧米ではロボットを使っての内視鏡外科手術や、このロボットを遠隔操作によって行う手術への取り組みも始まっている。

近年、医療現場ではただ単に病気を治すだけでなく、術後のＱＯＬ（生活の質）を考え、より身体（からだ）への負担（侵襲）が少ない治療法が重要視されている。内視鏡外科手術はまさにこのような時代の要求を満たすものであり、爆発的に普及したのも当然のことといえる。この手術法では小さい切開創ですみ術後の痛みが少ないことや、手術跡が殆ど目立たずまた、入院日数が短縮されることなど、患者さんにとっての利点が多いだけでなく、医療費の抑制にもつながることから今後ますます普及していくものと考えられる。内視鏡外科手術手技はこれ迄の外科手術の概念を変える、まさに革命的な手術法である。従って、患者さんのためには、各専門科の壁を越えてこの技術が応用されていく必要がある。既に当院では、本法による頚部手術（前述）を耳鼻咽喉科と、そして腎摘除術を泌尿器科と協力して行っている。

一方、内視鏡外科手術法では従来の大きく切って行う手術とはまったく異なる手技と訓練が必要となる。したがって、この方法に十分に習熟していなければ、手術中の偶発症や術後の合併症の危険性が大きくなる。

滋賀医科大学では、４年前から内視鏡外科手術を学生の講義に取り入れ、また11年10月にはトレーニング・ラボを開設した（写真）。このトレーニング・ラボは県下の先生方にも広く開放し、自由に内視鏡外科手術の手技を練習していただけるシステムにしている。今後は、本学を卒業する外科系希望者には、トレーニング・ラボを通じての手技の訓練と実際の手術の経験を積み、本法を習得してから赴任していただく予定にしている。

11年10月に開設した内視鏡外科トレーニング・ラボ（トレーナー６台設置）

当科で作製したマネキン型トレーナー（練習器）